

巻頭言

ケンブリッジ大学を訪ねて

玉木 正男

今年の春、英国を訪れた。X線CT開発に成功したロンドンのEMI研究所を視察したのはそのノーベル賞受領の直前であり、核磁気共鳴診断法を早く実用化したスコットランドのアバディーン大学を見学したのも印象に残っている。それ以来久しぶりの今度の英国旅行は「半学半遊」いや九分まで遊びの旅であったが、オックスフォード大学同様現地に大学病院を持たないためか今まで出かけたことの無かったケンブリッジ大学のキャンパスを初めて訪れたのであった。

ロンドンから1時間余りの鉄道の旅で眺めるロンドン北郊の風景も実に美しい。

樹林に囲まれたCAM川とそれにかかるいくつかのBRIDGEは見飽きない眺めであり、これに接して広がる大学のキャンパスは、出入りの門はあるが開放され、一般外来者は自由に美しい公園を散歩する気分、文字通りの「学園」をあちこちぶらつくことができる。ケンブリッジ大学が創られたのはわが国の鎌倉時代の終わり頃であるが、それ以来700年、卒業生に物理学者のNewton、米国ハーバード大学の創立者といえるHarvardが名を連ねているなど学問、教育の話は別として、外観もすばらしいと感じた次第である。

百数十年の歴史を持つにすぎないわが国の大学にも、学問、教育以外にも配慮すべき重要なことがあるように思えてならない。

(財団理事・大阪市立大学名誉教授)